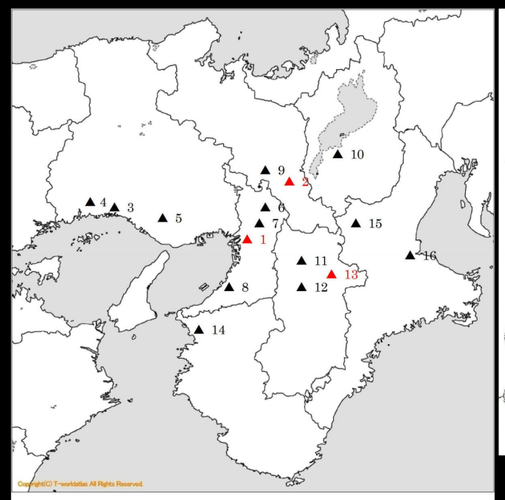
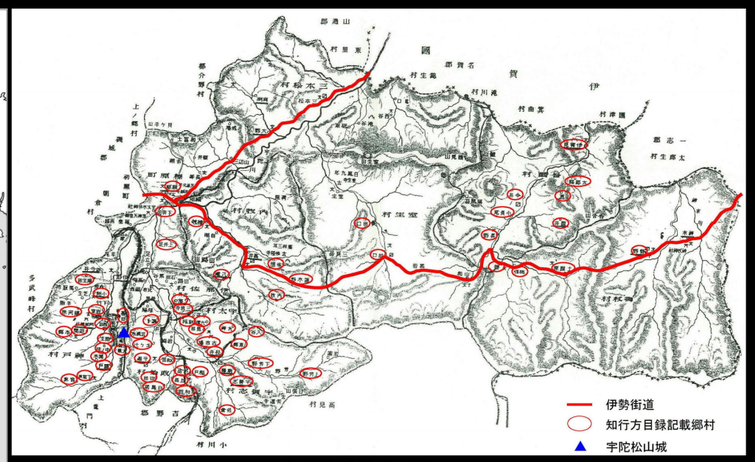
四、大坂を守護し奉る



河内・山城	播磨（山陽道）	摂津（京街道（大坂街道））
1. **大坂城** 2. **聚楽第**	3. 姫路城 4. 龍野城 5. 三木城	6. 高槻城(秀吉代官支配) 7. 茨木城(秀吉代官支配)
和泉（紀州街道）	**丹波（山陰道）**	**近江（東海道・東山道）**
8. 岸和田城(中村一氏)	9. 亀山城(羽柴秀勝)	10. 八幡山城(豊臣秀次) ※琵琶湖周辺（水口・長浜・佐和山等）の城郭に重臣を配置。

大和（大和街道・伊勢街道）	紀伊（紀州街道）	伊賀（伊賀越え道）	南伊勢（伊勢街道）
11. 大和郡山城(豊臣秀長) 12. 高取城(秀長代官支配) 13. **宇陀松山城(伊藤掃部助)**	14. 和歌山城 (秀長代官支配)	15. 伊賀上野城 (筒井定次)	16. 松ヶ島城 (蒲生氏郷)

豊臣政権初期の畿内近国支配と主要城郭位置図



多賀秀種知行郷村分布図

天正 11(1583)~14(1586)年にかけて畿内及びその近国の制圧を成し遂げた秀吉は、所領内の国分けを行った。大坂と諸国を結ぶ街道沿いに左のような諸城を置き、一門・直臣体制を確立する。

天正 13 年(1585)、宇陀郡へ入部した伊藤掃部助は、翌 14 年の紀州合戦で討死する。しかし、その後も宇陀松山城へは、加藤光泰・羽田正親・多賀秀種ら秀吉・秀長配下の武将が入る。さて、豊臣政権下における大和支配について見たとき、本城である郡山城を中心に、高取城と宇陀松山城の 2 支城による 3 城体制での支配を意図していたことが分かる。そこでは、大和南部の支配拠点としてだけでなく、大和一国の詰城的性格をもつ高取城に対し、宇陀松山城は畿内と東国との境目の城、東国に対する最前線の城として位置付けられる。

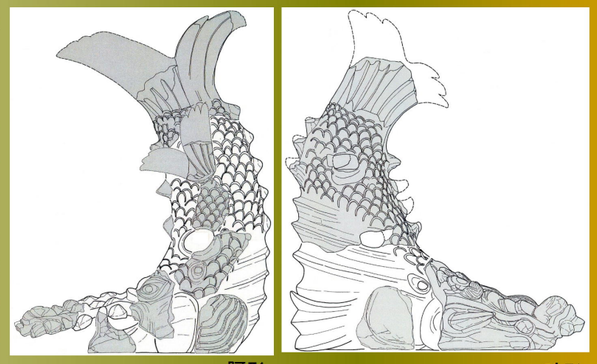
では、具体的に宇陀松山城が担った役割とはどういうものなのか。宇陀松山城の本格的な改修整備に着手した多賀秀種には、文禄 4 年(1595)の検地後に改めて知行高 2 万 659 石が下されている。この時の「多賀出雲守大和国宇陀郡知行方目録」を見ると、多賀氏の知行地の分布には大きな偏りがある。一つは、居城である宇陀松山城を中心とした口宇陀地域南部に知行地が集中する。そして、今一つは、伊勢本街道に沿いの郷村を治めているのである。言うまでもなく、伊勢本街道は中世から近世にかけて大和国と伊勢国南部を結ぶ幹線道であった。多賀氏の知行地が伊勢本街道沿いに集中し、青越え街道沿いに認められないことが、宇陀松山城のもつ性格を如実に現していると言えよう。宇陀松山城は、宇陀郡支配の拠点であるとともに、伊勢国南部へ通じる幹線道たる伊勢本街道を押さえることを役割として担った城郭として位置付けられるのである。

コラム二　あ・うん

阿吽（あうん）とは仏教の真言の一つ。転じて対になる物を表す用語として使用されるようになり、狛犬・仁王など一対で存在する宗教的な像のモチーフとなった。ところで、鯱瓦にも阿吽が存在することはご存じだろうか。

鯱は、頭が龍（もしくは虎）、体が魚という想像上の霊獣で、火伏せの霊験をもつという。鯱瓦はそれを模して屋根に使われる飾瓦・役瓦の一種で、大棟の両端に取り付け、建物が火災の時には水を噴き出して火を消すと考えられている。鎌倉時代に唐様の建築とともに中国から伝来したもので、寺院本堂内の厨子の大棟などに木製のものが用いられた。城郭建築での鯱瓦の使用は、織田信長の安土城(天正 4 年(1576)築城開始)をその嚆矢とする。天守郭周辺部から出土した鯱瓦には、口を開いた開口タイプ(阿形)と口を閉じた閉口タイプ(吽形)がそれぞれ 2 個体ずつ存在したことが判明している。阿形と吽形の鯱瓦がセットで配置されたのか、阿形同士、吽形同士がセットで配されたのか興味が尽きない。

天守郭出土鯱瓦復元図



阿形　　吽形

史跡宇陀松山城跡出土資料展

2013

宇陀市教育委員会

一、天守建つ

近年の天守郭周辺で行った調査により、天守郭全体の構造が次第に明らかになりつつある。

1) 南北に張り出し(横矢枡形)をもつ特徴的な平面プランを示す。

2) 天守郭上に建物礎石が確認できる。

3) 天守郭周囲から夥しい量の瓦が出土する。

4) 天守郭上の建物で用いる為の軒平瓦(桐文・桔梗文)が存在する。

5) 家紋鬼瓦が集中する。

6) 複数個体(4 個体以上)の鯱瓦が出土する。

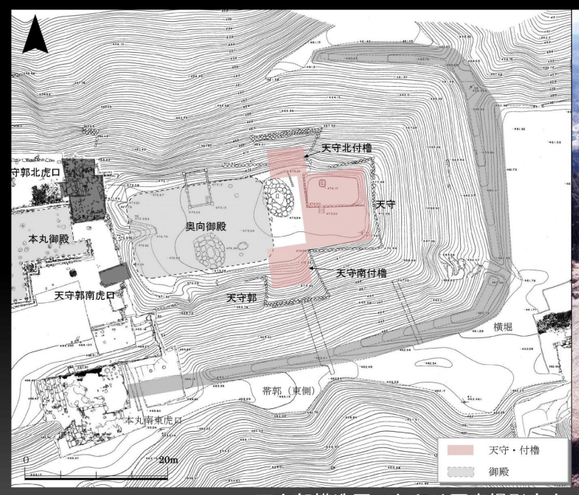
7) 鯱瓦が大型のものである。

8) 上記の鬼瓦や鯱瓦が城郭中枢部の最も奥まった地点から出土する。

9) 文禄 3 年写の『阿紀山城図』に「天守」の書き込みが見られる。

鯱瓦(天守郭)

以上の点から考えて、郭上には「天守」に相当する建物が存在したと考えられる。その場所は、南北の張り出し部から東側の方形区画に当たる。この方形区画部分の平坦面を石垣の推定天端位置から復元すると、南北 12m(間口 6 間)× 東西 10~11m(奥行 5 間~5 間半)の規模となり、小規模な天守(三重天守等)には相応した広さを有する。また、南北の張り出し部上には「天守」との連絡が可能な付櫓が建ち、その西側は城主の日常の居所空間である「奥向御殿」の建物群が郭上全面に構えられていたのであろう。「奥向御殿」は天守郭北虎口を介し、本丸の「表向御殿」へと繋がる。先の家紋鬼瓦や鯱瓦は、こうした建物の棟端を飾っていたのである。



天守郭構造図／矢印は写真撮影方向

天守郭全景(北東から)

二、多賀出雲守にて候

天守郭周辺部の調査において家紋(酢漿草文)を表現する鬼瓦が複数個体出土した。一ヶ所に集中することなく、天守郭東側の周囲何れからも出土している。出土状況から判断して、天守郭上に建つ建物を飾っていたと考えて間違いない。また、南西虎口部の隅櫓周辺からも出土している。

宇陀松山城の歴代城主の中で酢漿草文を家紋とするのは多賀出雲守秀種があげられる。多賀秀種は、堀重治の次男として生まれ(永禄 8 年(1565))、近江国高島郡の国人、多賀貞能の婿養子となり多賀姓を名乗る。天正 10 年(1582)の本能寺の変で明智光秀に与し改易となる。その後、兄秀政に家臣として仕え 8,000 石を領する。佐和山城の城代を務める。秀政の死後、豊臣秀長・秀吉に仕え、小牧・長久手の戦い、小田原攻めなどに従軍する。文禄元年(1592)に宇陀郡へ入部する。文禄 4 年(1595)には、検地の上改めて宇陀郡内 2 万 659 石を領している。慶長 5 年(1600)の関ヶ原の戦いで西軍に与したことで改易となる。

酢漿草文鬼瓦(天守郭)

城郭中枢部や大手に当たる南西虎口部から多賀氏の家紋瓦が出土したことで、城下含めた宇陀松山城全体の本格的な整備が、多賀秀種により着手された可能性が高くなった。

三、鬼面百相

宇陀松山城跡からは多様な造形の鬼瓦が出土している。そのモチーフは、鬼面・雷神・亀・桃・巾着・桐文・菊文・家紋など多彩である。鬼面にしても同じ表情のものはない。それぞれに瓦工人や城主側の意図なり意味が込められているのである。通常、瓦工人の中で鬼瓦等の飾瓦を製作する者を特に「鬼師」と呼ぶ。宇陀松山城の瓦作りには何処の瓦工人が関わっていたのか。残念ながら銘文は、「宗兵ゑ」の名が 1 個体に認められるに止まり、これからの調査・研究を待たねばならない。また、雷神の全体のポーズや細部の意匠・表現等が俵屋宗達筆『風神雷神図屏風』の雷神図と酷似している。雷神の造形の基になる共通の何かが存在するのだろうか。いずれにしても、雷神や象型瓦製品に見られる見事な表現力は単に鬼瓦という枠を超え、一つの造形作品と呼んでも良いものである。

鬼面(天守郭)

桐文(本丸跡)

鬼面(南西虎口部)

亀・巾着(本丸跡)

雷神(本丸跡)

菊文
(本丸跡)

桃
(本丸跡)

鬼面(本丸跡・天守郭)

コラム―　一品と逸品

宇陀松山城跡の出土品の中で、鬼瓦ではないがここに紹介する資料はそのユニークさにおいて群を抜いている。資料は瓦製で象の顔を模ったものである。内部は中空、底部は平坦になる。本丸跡から出土した。うねるように表現された皺や筋肉、2 本の牙に印象的なアーモンド形の目と大きな耳、デフォルメされてはいるが細部と全体の均整がとれ、むしろ象の顔の特徴を良く捉えており、製作者である瓦工人(鬼師)の力量の高さが伺える。異形とも感じるその表情には見た者を捉えて離さない独特な存在感さえ漂う。これまでの所、本資料のような類例は他になく、その意味ではまさしく一品であり、かつ逸品と言える。

象型瓦製品(本丸跡)

象は古代から霊獣とされ、普賢菩薩の乗る白象として仏像・仏画に表されてきた。同時代資料としては有名な俵屋宗達筆とされる京都、養源院の杉戸に描かれた白象がある。両者の顔の表現には共通した要素が感じられる。さて、この資料の用途としては、先ず「象鼻」が考えられる。しかし、本資料には横材等に釘・鉄線で固定する為の釘穴や把手が一切見られない。このことから、「象鼻」や鬼瓦等の役瓦の一種である可能性は低い。底面が平らである所から安定した場所で使用されたことが想定でき、「香象」のように、室内で香を焚く時の香炉(覆い)として用いられたものである可能性を考慮したい。